

序章 転換点としての2010年

著者	中川 雅彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	情勢分析レポート
シリーズ番号	15
雑誌名	朝鮮労働党の権力後継
ページ	1-8
発行年	2011
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00014701

転換点としての 2010 年

中川 雅彦

2008 年 8 月 15 日から 10 月 3 日までの間に朝鮮中央通信などの朝鮮民主主義人民共和国の公式メディアが最高指導者である金正日の動静に関する報道をまったく行わなかった。そのことで金正日健康悪化説が急速に広まり、次の指導者に関する憶測もなされるようになった。そして、2009 年から金正日の後継問題が韓国や日本などの報道で取り上げられるようになったが、朝鮮側の公式メディアで後継問題について直接語られることはなかった。

2010 年に、後継者といわれる人物が公の席に姿を現し、その写真も公開された。そして、その人物の名前は、それまで日本や韓国などの報道でいわれてきた「金正銀」ではなく、「金正恩」であることも通知されてきた。しかし、朝鮮側の公式メディアは後継問題そのものに言及することはなく、この人物が後継者であるとも述べていない。

本研究は朝鮮民主主義人民共和国における後継者問題について、その後継者が引き継ぐものに焦点を当てるものであるが、まずは、その議論に先立って、そもそも後継者問題に関する基本的な情報の真偽を検証しなければならない状況にある。そこで、この作業を進めるのに大きな助けとなるのが、現在の最高指導者とその前任者の後継者となって実際に権力の移譲が完成するまでの過程との比較である。この比較により、さまざまな情報を正確なものとそうでないもの、そしてその中間にあるものでも比較的確実なものとそうでないものに区分することができる。そのみならず、この問題に関してある程度の展望を試みることができるようになるであろう。

第 1 節 後継者決定の伝達

現在の最高指導者金正日が金日成の後継者に決定されたのが 1974 年 2 月 13 日であったことは、在日朝鮮人総聯合会が 1995 年に出版した『金日成略伝』や平壤の外国文出版社が 2001 年に出版した同名の『金日成略伝』などの記述で確認することができる(在日朝鮮人総聯合会 [1995: 53]; 外国文出版社 [2001: 67-70])。しかし、公式メディアで後継者決定に関する日付が現れたのは、1991 年 12 月 24 日の『労働新聞』が、朝鮮労働党の党史である『朝鮮労働党歴史』が出版されたことを報道した記事のなかであり、同書に後継者決定が「1974 年 2 月に開かれた党中央委員会第 5 期第 8 次全員会議」であったと記されていることが明らかにされた(『労働新聞』1991 年 12 月 24 日; 朝鮮労働党出版社 [1991: 473])。それまでそのことは秘密にされていた⁽¹⁾。

後継者が決定したこと自体は曖昧な形で一部の在日朝鮮人や訪朝した報道関係者などに伝達あるいはリークされていた。たとえば、1974 年 11 月 19 日に日本の新聞は「金正一」の写真を公表した(『信濃毎日新聞(夕刊)』1974 年 11 月 19 日)。そして後継者決定が明確な形で在日朝鮮人総聯合会に文書で伝達されたのは 1977 年 1 月であり、在日朝鮮人総聯合会は 2 月 2、3 日に全国の地方幹部たちにもこれを伝達し、24 日に日本の各紙がこのことを報じるようになった[『東京新聞』1977 年 2 月 24 日; 『毎日新聞』同日; 『サンケイ新聞』同日]。しかし、1980 年 10 月の党大会まで、金正日の名前が朝鮮側の公式メディアに出てくることはなかった。「金正日」という表記が明確にされたのもこのときであった。このように、金正日が後継者に決定した情報を内外に伝達した方法は、意図的に少数の人々に曖昧な形で伝達することから始まって段階的に情報を明確にしていくという特異なものであった。

金正恩の場合、最初の報道は 2009 年 1 月 15 日に聯合ニュース(韓国)が「情報筋」の話として報じたものであった。その内容は、① 2009 年 1 月 8 日ごろ、金正日が党組織指導部に対して、第 3 夫人の故・高英姫が産んだ「金正雲」を後継者に決めたと教示した、② 党組織指導部の李済剛第 1 副部長が課長級以上の幹部を緊急招集してこの決定事項を伝達した後、各道党にも伝達した、③ 高位層を中心に後継者決定に関する情報が急速に広まっているというもので

あった(聯合ニュース[韓国] 2009 年 1 月 15 日発)。

この情報のうち、後継者が決定したことは、①韓国側で「親北的」といわれる月刊誌『民族 21』が 6 月号の特集で、後継者が「金正雲」であるとする特集記事を掲載したこと(『民族 21』第 99 巻 16～25 ページ)、②中国の『環球時報』が、6 月 17 日の「とある国の駐朝大使」の話として、「金正雲」に関連した情報について「こうしたニュースは正確である」、「金正日の健康はすでに大きな問題が出ており、その状況がかなり悪いため後継者は確定している」といった発言を報じたこと(『環球時報』2009 年 6 月 18 日)、③ 6 月 18 日に、日本の新聞で、北京の朝鮮大使館で後継者の決定を示唆する電文が 5 月 28 日に送られてきていたという報道がなされたこと(『東京新聞』2009 年 6 月 18 日)、④同じころ、一部の在日朝鮮人総聯合会の関係者に対して平壤から、「後継者は血縁者である」ということが伝達されたことで裏付けられた。このように外信報道や在日朝鮮人組織を利用した段階的な伝達方法は金正日の場合と基本的に共通しているといえる。

「金正雲」とされた金正恩の存在については、1989 年から 2001 年まで金正日の専属料理人であった人物の手記により、すでに 2003 年に明らかにされている。それによると、金正恩は 1983 年 1 月 8 日生まれであること、「大将同志」と呼ばれていたということ、母親が日本からの帰国者である高英姫であることも述べられている(藤本[2003:124-126,129-130]; [2006:121-138])。こうした情報は、本人に直接接していた人物によるものであることからしてもかなり確度の高い情報であるといえる。ただし、誕生日については、月日は正しいが、1984 年であるという情報もある(『毎日新聞』2010 年 1 月 10 日)。

なお、金正日の他の子供については、金正恩の兄の金正哲がいることが前述の専属料理人の手記などでわかるほか、長男の金正男がいることが知られている。金正男の存在は、韓国の女優である崔銀姫が、1978 年 2 月 16 日に当時 10 歳の金正男と会ったことを 1987 年に発表したことで知られるようになった。また崔銀姫は金正男の下に女の子がいることを金正日から聞いている(崔銀姫・申相玉[1989: 94-95])。金正男は 1980 年 3 月にジュネーブの国際学校に留学したが、その母親である成蕙琳の姉の息子が 1982 年に韓国側に亡命したこともあって、後継者の地位から遠ざかることになったようである(成蕙琅[2003:143,471-485])。その後、2001 年 5 月 1 日に「金正男と見られる人物」

が成田空港で偽装旅券のため拘束され、外務大臣の指示で5月4日に釈放されて、北京に出発するという事件があったが、この人物が本人であることは間違いない。この時点ですでに金正男が後継者になる可能性は断たれていたと見られ、海外の観察者たちは金正哲に注目していた。

海外で流布している金正日の家族構成についての情報は朝鮮側も当然把握していないはずはない。そのため、1月の聯合ニュースの情報は、金正哲ではなく金正恩が後継者であることを朝鮮側が海外に意図的に知らせるために伝達したものである可能性が高い。したがって、後継者が決定された時期や党内の伝達方法についても、この聯合ニュースの情報はかなり確度の高いものといえよう。

第2節 後継者の可視化

金正日は1980年10月10～14日に開かれた党第6次大会で公の席に姿を現し、党政治局常務委員、党秘書（書記）、党中央軍事委員会委員に選出された。当時、38歳であった。それ以前には、秘密にされていたが、1964年6月19日から党中央委員会で活動を始め、1970年9月に副部長、1972年10月に中央委員、1973年7月に部長、同年9月17日に秘書（書記）に就任し、1974年2月13日に「金日成同志の唯一の後継者」に指名されるとともに政治委員会委員に就任したことが知られている。公に姿を現してから、しばしば、金日成の現地指導に同行するだけでなく、自らも地方や各機関を現地指導に回り、1991年12月24日に朝鮮人民軍最高司令官に、1993年4月9日には国防委員会委員長に就任して、1994年7月8日に金日成が死去したときには党組織と軍隊で最高の地位に上っていた。金正日の場合、後継者として可視化してから事実上の最高指導者になるまでの間は指導者としての実績を積む期間であったといえる。

金正恩の名前が最初に公式メディアに出たのは、2010年9月27日に下達された人民軍最高司令官命令によって人民軍大將に就任したときであり、公に姿を現したのは、28日の党代表者会とともに開催された9月28日党中央委員会全員会議で、党中央軍事委員会副委員長に選出された翌29日に公開され

た写真によってであった。それ以前の経歴については公式メディアで一切発表されていないが、訪朝した在日朝鮮人たちから筆者が聞いた話によると、平壤市民に知られているところでは、人民軍部隊に勤務したことがあり、金日成軍事総合大学を卒業し、すでに「大将」と呼ばれていたという。この情報のうち、「大将」については、2009 年 4 月 26 日に金正日が元山農業大学を訪問したときに金正恩も同行し、金正日から「金大将」と呼ばれていたことが確認された⁽²⁾。したがって、当時は正式の「大将」ではなかったにしろ、「大将」と呼ばれていたことは間違いなく、部隊勤務の経歴も金日成軍事総合大学卒業の経歴も確度の高い情報であるといえる。

このほか可視化以前の活動歴について、『産経新聞』が朝鮮通信 2010 年 12 月 22 日発の写真を引き伸ばして掲載した記事から、金正恩が 2008 年 12 月 20 日に慈江道にある熙川青年電気連合企業所を訪問したことが知られるようになった（『産経新聞』2010 年 12 月 25 日）。この工場は軍需工業を担当する第 2 経済委員会傘下の工場であり⁽³⁾、この訪問は金正恩が今後軍需工業部門に影響力を持つようになる可能性を示唆している。それから、『労働新聞』2010 年 12 月 22 日に掲載された写真から、2009 年 5 月 9 日に金正日が、熙川工作機械総合工場を現地指導した際にも同行したことも知ることができる。

ただし、『朝日新聞』2009 年 6 月 16 日および 6 月 18 日の記事で、金正恩が中国を訪問し、その際に金正男が金正恩を中国の指導者に紹介したとの報道があったが、この情報が事実である可能性は小さい。それは、前述した金正日の専属料理人の手記でも金正恩と金正男に接点を見出すことができず、また、中国外交部が 18 日の記者会見で強く否定したためである。

可視化以降、金正恩は金正日の軍隊、企業などの現地指導にたびたび同行するようになった。2010 年は、党内で金正日から金正恩への権力移譲の準備が始まった年であり、金正恩が公の実績作りに動き出した年であるといえよう。

第 3 節 本研究の課題

金正恩がすでに金正日の後継者となっていることは、公式メディアで言及がないにしても、金正日の場合と同様にさまざまな非公式な伝達方法で通知され

ており、確実であることは確認された。そして、その姿が公の席に現れたことは、金正日の場合と同様、指導者としての実績作りの過程に入ったといえる。今後、徐々に、金正日の権限が金正恩に委譲されることになるであろう。ただし、金正恩が最終的に引き継ぐのは政治理念や党組織だけではない。国家の現状に関する責任も引き継がれるのである。

本研究は、この後継者が継承する朝鮮労働党の理念と朝鮮民主主義人民共和国の現実を明らかにしようとするものである。本報告書の第1章は前者の問題、第2章以降は後者の問題を扱うことになる。

第1章では、金正日時代に形成された政治理念と2010年に開催された党代表者会で構成された党の組織を分析する。

第2章では、経済制裁を中心とした国際環境とそれに対する対外政策を分析する。

第3章では、国内経済に関して、2009年末に実施された貨幣交換に関する分析をもとにマクロ経済での展望を試みる。

第4章では、対外経済関係に関して、党の政策の変遷過程を分析することにより、今後、党がどこに活路を見出そうとしているのかを明らかにしようとする。

第5章では、同じく対外経済関係に関して、主要な相手国との貿易や投資の状況を分析する。

これらの章の執筆者のうち、在日朝鮮人研究者である3人は2010年に研究目的で訪朝し、現地の研究者や経済関係者から貴重な情報を得ており、この報告書のなかでその一部を公開することになった。

なお、金正恩が権力を完全に引き継ぐのは、金正日の例から類推すれば、金正日自身が身体的に権力を行使できなくなる時であると考えられ、その時期を特定することはできない。その間、政治状況も経済状況も変化するであろうが、本研究は現時点での動向を分析することで、この国の政治および経済を展望するための一助としたい。

【注】

(1) このことを最初に指摘したのは鐸木昌之聖学院大学専任講師(当時)が1992年

に刊行した研究書においてである (鐸木 [1992: 84-85])。また、平壤の外国文出版社が 1998 年に日本語で刊行した『金正日略伝』では後継者の決定そのものには触れず、1974 年 2 月 13 日の党中央委員会第 5 期第 8 次全会議で金正日が党政治委員会委員に選出されたことだけが記載されている (外国文出版社 [1998: 44])。

- (2) また、このことを最初に報じたのは『毎日新聞』2009 年 11 月 29 日の北京発の報道である (『毎日新聞』2009 年 11 月 29 日; 金正日 [2009: 7])。ただし、『毎日新聞』記事のなかの「元山訪問が 4 月 25 日と確認」との内容は誤りである。
- (3) 熙川青年電気連合企業所は 1960 年代から中国の協力によって建設された熙川青年電気工場を母体とする企業連合であり、軍需工場である (《当代中国》叢書編輯部 [1989: 177]; 当代中国叢書編輯部 [1987: 658]; 李福九 [2003: 24,35-50])。

【文献目録】

< 日本語文献 >

- 李福九 [2003] 『標的は東京！北朝鮮弾道ミサイルの最高機密』金燦編・訳 徳間書店。
- 外国文出版社 [1998] 『金日成略伝』平壤 外国文出版社。
- [2001] 『金日成略伝』平壤 外国文出版社。
- 在日朝鮮人総聯合会 [1995] 『金日成略伝』雄山閣。
- 鐸木昌之 [1992] 『北朝鮮——社会主義と伝統の共鳴——』東京大学出版会。
- 成蕙琅 [2003] 『北朝鮮はるかなり——金正日官邸で暮らした 20 年——』萩原遼訳 文藝春秋。
- 崔銀姫・申相玉 [1989] 『闇からの罅——北朝鮮の内幕(上)——』池田菊敏訳 文藝春秋。
- 藤本健二 [2003] 『金正日の料理人』扶桑社。
- [2006] 『金正日の料理人「最後の極秘メモ」——核と女を愛した將軍様——』小学館。

< 朝鮮語文献 >

- 金正日 [2009] 『元山農業大学は誇らしい歴史と伝統を継いで教育事業と科学技術事業をうまく進めていかなければなりません——元山農業大学を現地指導しながら活動家たちと行った談話(2009 年 4 月 26 日)——』平壤 朝鮮労働党出版社。
- 朝鮮労働党出版社 [1991] 『朝鮮労働党歴史』平壤 朝鮮労働党出版社。

< 中国語文献 >

《当代中国》叢書編輯部編 [1989] 『当代中国的对外經濟合作』 北京 中国社会科学出版社。

当代中国叢書編輯部編 [1987] 『当代中国的電子工業』 北京 中国社会科学出版社。